

食事場面における幼児期の子どもを持つ家族のコミュニケーションの意味

香曾我部琢*・千葉 留莉**・水野佳津子***・松延 毅****

Meaning of Interactions in Lunch with Parents and Child

KOUSOKABE Taku, CHIBA Ruri, MIZUNO Kazuko and MATSUNOBE Tsuyoshi

要 旨

本研究では、幼児を持つ家族と一緒に昼食を摂る際に、どのような相互作用を行っているのか明らかにすることで、家族と一緒に食事をする意味について検討を行うものである。その結果、家族間のコミュニケーション方略として、大分類2つ、中分類4つ、小分類8つの存在が明らかとなった。そして、このコミュニケーション方略を用いながら、食事を進めている家族の実相から、一緒に「食べること」、「話をする事」の2つが組み合わさって家族の関係性を高めるだけでなく、その社会性や人間性を高めるために二重の効果があることが示唆された。

Key words：幼児

家族

コミュニケーション方略

社会性

人間性

1. 問題と現状

幼児期における食習慣確立の重要性

幼児期の食事は発育発達だけではなく、生涯にわたる望ましい生活習慣、とりわけ食習慣を身につける大切な時期でもある。しかし、近年、幼児・児童の間で、生活習慣病リスク保有者が年々増加傾向にあり、生活習慣の乱れや体力低下、体格異常、高度肥満の低年齢化、肥満に伴う合併症の顕在化、不登校や心理情緒面への悪影響など様々な問題が指摘されている。その要因として、生活習慣の乱れ、食事の不規則さや偏り、運動不足、不規則な生活リズム、ストレスなどの心理状態、養育者の意識の変化など様々なものが挙げられ

ており、子供たちを取り巻く社会や環境の急激な変化が影響していることも要因として考慮する必要があると言われている。一方、食事と家族との関連について、肥満の母親は非肥満児に対して子どもの間食を制限しない傾向があること、肥満児の発症頻度は母親あるいは両親が肥満である場合に最も高いことが示唆されている（中村，2010）。幼児期の食生活管理は主として母親に委ねられており、母親の意識などが子どもの栄養や食生活状況に大きく関わってくことを踏まえると当然の結果であると考えられる。これらを踏まえ、幼児期の体型は学童期の体型と高い相関があることから、学童期や思春期の高度肥満予防はもちろん生活習慣病予防においても、幼児期からの対策を行う必要が

* 宮城教育大学家庭科教育講座

** 宮城教育大学大学院

*** 立正佼成会附属 佼成育子園

**** 社会福祉法人 浄勝会 出雲崎保育園

あり、子どもに規則正しい生活習慣、食習慣、運動習慣を身に付ける重要性を理解させること、さらに、母親などの養育者が子どもを取り巻く食環境、生活環境などをアセスメントする力が求められていることは明らかである。望ましい生活・食・運動習慣を身に付けた幼児は心身ともに健康的な日常生活を営むことで、生涯を通じて生活習慣病予防が可能となると考えられる。

近年、食育という概念が教育の場である小学校・中学校の中に持ち込まれ、学校教育における食育の重要性が問われてきた。しかし、本来食育というものは学校入学後から行うのではなく、入学時より前から継続的に行うべきものである。特に、母親の母乳から大人と同じ食事をとるようになる幼児期において、食事のとり方や食具の用い方などを正しく学ぶことは子どもにとってそれ以降の心身の健全な発育発達において重要なことであろう。

人が共に食べることの意義

食事は第一義的には生物学的必要性を満たすため、つまり栄養を摂取するためのものである。しかし、人間の食事を生物学的な観点からのみとらえることは適当ではない。人間以外の霊長類において食べることは個人的な行為であるが、人間においては個人単位で食事をとることが通常とされている社会はなく、人間は「共食をする動物」と言われている（外山，2008）。私たち人間にとって食事は生物学的必要性を満たす場であると同時に社会文化的な営みの場でもある。生物学的でありながら社会的でもある食事という活動が、発達初期にどのように成立していくかを明らかにすることは、食行動の発達に新たな資料を与えるものと考えられる。

家族が共に食事をすることの重要性

外山（2008）¹は、食事場面での子どもの発達を食事という文化的活動に参加していく過程としてとらえ、1～3歳児と母親の家庭での食事場면을観察した。そして、どのような社会的相互交渉を経て、文化的活動としての食事が成立していくのかを検討している。食事という活動は食事の時間内だけではなく、準備や後片付けなども含め様々な事柄によって構成されているが、同研究では（1）食物の摂取（摂食）、（2）マナーを守る（身につける）、（3）おしゃべりをするという3点に

焦点をあてた。

観察は、昼食を対象に母子2人だけの状況で行った。子どもの成育歴や日ごろの食事状況について簡単なインタビューを行った後、食事場면을録画し、食事終了後補足的なインタビューを行った。収録されたビデオを元に、母子の全発話をはじめとする様々な行動を転記した。まず、食物が口に入るタイミングで発話される型の決まったやりとり（ルーティン）を抜き出し、次にそれ以外の母子のやりとり（エピソード）を話題によって区切った。この話題は前述に焦点として挙げた「摂食」「マナー」「おしゃべり」の3点とそれ以外の「その他」に大きく分類し、さらにそれぞれの項目において複数に分けた。また、食欲は子どもが咀嚼しているかどうかを資料とした。

1歳児は、母親に食べさせてもらうことが多かったが、子どもが自分で食べる場合でも母親が食べさせる場合でも、子どもの口に食物が入るタイミングで定型的なやりとり（ルーティン）が頻繁に話された。モノの配置を変更することで子どもを統制しようとする働きかけも1歳児に特徴的であった。母子の相互交渉は、子供の食欲の有無によっても相違があった。子供が咀嚼していない時には、母親は子どもの“おしゃべり”に応答せず、摂食へと注意を促すことが多かった。母親は子どもが咀嚼しているかどうかによって、モノの構成と配置を調整することも認められた。子どもが咀嚼している時には、子どもの前に食物や食具を置き、子どもの自由になる領域を拡大させたが、子供が咀嚼していない時には、その領域を縮小させることが多かった。

食具を使って食べる技能は、加齢とともに発達していった。1歳児はほとんど母親に食べさせてもらっていたが、3歳児ではほぼ自分で食具を使って食べていた。子どもの摂食にあわせたルーティンは少なくなるが、母親自身の摂食にあわせたルーティンは1歳児よりむしろ多くなった。これは子どもが咀嚼していた時よりしていなかった時に頻繁だったことから、食事が食べることを主目的とした時間であることを示す行為とも解釈できる。子どもが食べていないと、子どもから話しかけられても応答しないという対応も顕著であった。つまり、子どもは3歳になる頃までに、母親から間接的な働きかけを受けるだけで、おしゃべりをしながら食べるという食事に参加できるようになるといえる。

これは、外山ら（1990）による食事場面での母親の

発話に制約を与える要因として、子どもの年齢および基本的食事習慣の習得程度に焦点を当てた研究においても類似のことが確認されている。子どもの年齢が高いほど、そして習得程度が高いほど、母親は目の前の摂食から離れた話題を多く取り上げることが示された。年齢が上がるにつれて、幼児と母親との食事場面は、食べて食物を摂取するという生理的意味合いの場から、コミュニケーション方略を行い、会話を楽しみながら楽しく食事するという文化的あるいは社会的意味合いの強い場へと変化していくといえる。

近年共働きの家庭が多く、母親はもちろん、父親の育児参加も重要となってきた。まだ社会全体に浸透しているわけではないが、育休を取る男性も増えており、子父親と子どもの関係も無視できない。

- (1) 幼児期における食習慣確立の重要
- (2) 現代における共食の問題提起
- (3) 親子で食事をする意味
- (4) 父親が食事に加わること

しかしながら、先行研究を概観すると、母親と幼児の食事場면을対象とした研究は見られるものの、父親を含めた家族単位での幼児の食事場面に関する研究はなされていない。しかし、内閣府食育推進室（2010, 2011）の調査結果では、家族全員で朝食・夕食を食べるという人が5割を超えており、日常の食事では母子のみではなく、父親も含めた家族で食事をしている現状が示された。また、岩田（2011）は、食事場面での話題について、父親がいる場合に社会に関する内容が多く、幼稚園や親類に関する内容が少なくなることを明らかにし、食事場面での話題の質的な違いを指摘した。また、岡田（2001a, 2001b, 2003）においても、小・中学生を対象とした研究ではあるものの、食事場面において子ども－父親と、子ども－母親での会話の内容に違いがあり、加齢に応じて変化していることを示唆している。すなわち、幼児期においても、父親が加わった家族での食事場面が日常的にも多く、父親が加わることでそこでの話題や内容に違いが生じ、母子だけの食事場面とは異なる相互作用が生み出されていると考えられるのである。

そこで、本研究では、母親と子どもの二者のみの食事場面ではなく、父親も含めた家族という単位での食事場面に着目した。そこで母親と父親、子どもが互いに相互作用しながら、食事という行為を共に行って

るのか、その実相を明らかにし、家族で食事を共にすることの意義について検討を行おうと考えた。

2. 研究方法

(1) 事例抽出の方法について

本研究では、食事場面において、母親と父親、幼児が生み出す相互作用の実相を明らかにすることを第1の目的としている。そのため、フィールドノートによって言語化された記録だけではなく、石黒（2001）が「直接的な方法で実際の出来事について情報を提供する」（すなわち、日常生活における社会的、心理的な現象に関する情報を直接的に、かつ繰り返し観察することが可能であり、他者と共有化することができる）映像データを用いたサンプリング方法を取り入れることとした。まずはじめに、(1) 家族での食事場면을ビデオで映像を撮影した。次に、(2) 映像データをもとにジェファソン（Jefferson）の表記表（Table 1参照）に従ってトランスクリプトを作成した。そして、最後に(3) トランスクリプトと映像データをもとに、簡単に図式化（ビデオ画面を簡単にトレースしたものに矢印や説明を加えたもの、Figure 2を参照）を作成した。映像データとトランスクリプト、図式データの3つのデータによって、ギアツ（Geertz, 1987/1973）の提唱した「分厚い記述」を目指し、分析を進めていこうと考えた。

Table 1 会話分析に用いている記号一覧（Jefferson, 1974/西阪, 1997）

記号	意 味	記号	意 味
[]	重なり	::	引き延ばし
[I]	同時発話	—	途切れ
=	密着	h	笑い
()	聞き取り困難	¥ ¥	笑いながら
(数字)	沈黙（秒数）	太字	大きい声
? 。	イントネーション	° °	小さい声

(2) 分析方法の選定

本研究では、父親と母親が幼児と共に食事を行う場面の相互作用を研究対象としているが、親から幼児に向けた摂食への言葉掛けやマナーの教授などのように、「父・母親→幼児」の一方方向的な相互作用を検討するだけではない。両親と幼児の三者が食事を通して、双

方向的に相互にかかわり合っている存在として、その相互作用を捉える必要があると考えた。そこで、西阪（1997）が示した、人が行う行為が、その行為の相手の期待に依存して決定され、さらに相手の行為も自分の期待に依存して決定される「二重の依存関係」を孕んでいることを前提としたエスノメソドロロジーの認識論に立ち、西阪（1997）が提唱した相互行為分析を用いた。相互行為分析は、現実の社会において行為に内在する「二重の依存関係」を見通しつつ、その行為において何が行われているのか、その意味と、構造的な枠組みについて明らかにするために有効な分析手法である。

(3) 分析の手続き

分析にあたっては、本研究では、西阪（1997）が「ある行為の秩序が、相互行為の具体的進行のなかで、またその具体的進行をとおして、その時々相互行為上の偶然的条件に依存しながら、いかに組織されているか、を記述する」と述べたように、食事という相互行為の中に内在する「二重の依存関係」を考慮しつつ、そこで営まれる父親と母親、幼児とが双方向的に相互作用を行う姿に着目して分析を行う。そのため、まず、(1) 作成したトランスクリプトをもとに、父親と母親、幼児とが相互作用した場面を切片化し、次に、(2) 抽出された場面の映像データを抽出する。その後、(3) 抽出した映像をトレースした図式データとトランスクリプトをもとに、再度映像を確認しつつ、父親と母親、幼児の発話と行為の意味を読み取ってラベルを付けた。(4) 類似したラベルをまとめ抽象度の高い見出しをつけ、分類を行った。その際には、トレースした図とトランスクリプトをもとに、父親と母親、幼児とが要因とその影響について、相互行為分析の視点に立って総合的

に解釈をし、分類を実施した。なお、分類については外山（2008）の分類一覧（Table 1）を参考にした。

(4) 事例収集の対象者、期日、及びデータについて

実際の映像データの事例収集の対象者は、A県内B市の3歳C児とその母親、父親共に30代で、共働きの夫婦で、B市内のアパートに居住している。観察と撮影は平成26年6月下旬に実施した。映像撮影に関しては、活動の邪魔にならないように、定点で母親に撮影を依頼した。また、昼食前にインフォーマルに母親に普段の状況や教育方針、食への意識についてインタビューを行った。撮影されたデータは合計で28分15秒であった。得られた映像データをもとに作成されたトランスクリプトは、A4用紙に計8頁であった。

3. 結果と考察

(1) コミュニケーション方略の分類

その結果、食事場面におけるトランスクリプトを56個に切片化し、27個のラベルを作成し、さらにそれらをまとめて8つの小分類を形成し、さらに4つの中分類、2つの大分類を作成した（Table 2 参照）。この分類に関しては、子どものいる母親と父親の2組のスーパーバイズを受けて、ラベル名と小分類名、大分類名の精査を行った。

本章では、4つの中分類をもとに、食事場面のプロトコルと図式を示して、その中分類の特徴がよく表れている部分を抽出し、併せてその考察を示す。

Table 2 母子間のエピソード・カテゴリー（外山, 2008）

カテゴリー	意味	サブカテゴリー
摂食	食べることを促したり、拒否したり、摂食をめぐるやりとり	食べる、おいしい、食欲、日課、社会的意義、生物学的意義
マナー	挨拶や食具の使い方、食べ物にふさわしい食べ方などマナーに関するやりとり	挨拶、座る、遊ばない、食べ方・食具
おしゃべり	一般的な話題をめぐるおしゃべり	状況、食べ物の一般的な話題、食べ物の社会的な話題、食べ物の生物学的な話題、一般的な話題
その他	聞き取れないやりとり、「あー」などの意味が明瞭でないやりとり、「トイレ行ってもいいですか？」など観察者に向けた発話	

Table 3 家族間のコミュニケーション分類一覧

	大分類名	i 言語コミュニケーション	ii 非言語コミュニケーション
	中分類名	ラベル	ラベル
A	小分類名 集中	A1: 言語-集中 味の確認 味の協調 勧める 嗜好性	A2: 非言語-集中 食べさせる 意識を向けさせる 食べ姿の見守り 様子の注視
B	作法・マナー	B1: 言語-作法・マナー 食事前後の挨拶 注意 食べ方の教授 準備・後片付け	B2: 非言語-作法・マナー 道具の使い方 座り方 準備・後片付け
C	円滑・楽しい雰囲気づくり	C1: 言語-円滑・楽しい雰囲気づくり 褒める お腹の空き具合の確認 味の感想	C2: 言語-円滑・楽しい雰囲気づくり 場所の要求と受容 場所の設定確認 食物摂取の要求と受容 食物摂取の確認 評価の確認 反応の伺い
D	共有化	D1: 言語-共有化 情報共有 情報確認	D2: 非言語-共有化 共通の情報獲得

【結果a】集中を促すコミュニケーション方略

トランスクリプト「A1: 言語-集中」

ラベル「味の確認」

父：どう？

子：おいしい（満面の笑みで）

父：おいしい？

子：（食べながらうなずき、さらに食事をする）

ラベル「嗜好性」

母：それハムばかりだね

子：うん

母：ハム好き？

子：うん

トランスクリプト「A2: 非言語-集中」

ラベル「様子の注視」

母：（海苔巻きを食べる。一度視線を子供へ向ける）

子：（視線はテレビへ、何も食べていない）

母：（注視をつづける）

子：（母の視線に気づき、母を見返し、食べ続ける）

ラベル「食べ姿の見守り」

母：（海苔巻きを食べながら、一度視線が子供へ向く）

子：（そうめんを口にいれながら、視線はテレビへ、
母の視線に気づき母親の方を見て口を動かしてはじめる）

母：（視線を合わせてその食べる様子を見守る）

【考察a】

トランスクリプトにおいて、食事をする行為に子どもの意識を向けさせるために用いている会話や身体接触、視線の動きによるコミュニケーション方略が多くみられ、これらを中分類「集中」としてまとめた。

さらに、小分類として母・父の言葉がけとそれに対する子の言葉による反応から始まる、食事に子どもの意識を向けさせるコミュニケーション方略を「A1: 言語-集中」とした。また、母・父の視線や身体的な行為に対して子どもの言葉や身体的な行為による反応から始まる、食事に子どもの意識を向けさせるコミュニケーション方略を「A2: 非言語-集中」とした。

「A1：言語－集中」では、子どもは父、母の注視の後の言葉がけに対して頷きや返事をするなど肯定的な態度を示しつつ、さらに語りかける父・母の言葉に対して食事を継続したり、より多くの食べ物を口にいたりする姿が見られた。そして、その姿を父・母が確認することでこの一連のコミュニケーション方略が終了していた。「A2：非言語－集中」でも、父・母が子どもを見るなどの非言語的な働きかけに対して、子どもが肯定的な態度を示しつつ、さらに食事する行為を見せ、それを父・母が確認することでこの一連のコミュニケーション方略が終了していた。このことから、この「集中」のコミュニケーション方略のプロセスとして、父・母から、子に向けられて一定の時間の「注視」の後に、「働きかけ」が行われ、それに対して「肯定的な態度」と「さらなる食事の強調」を連続して提示する。そして、その姿を父・母が「確認」というプロセスが存在することが明らかとなった（Figure 1）。

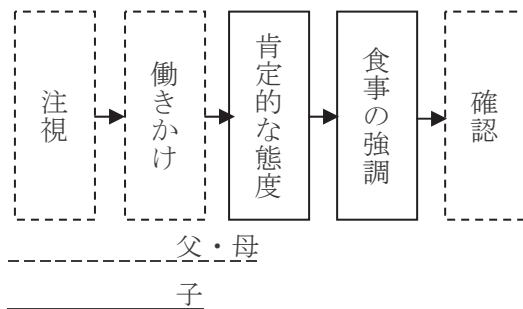


Figure 1 「集中」のコミュニケーションプロセス

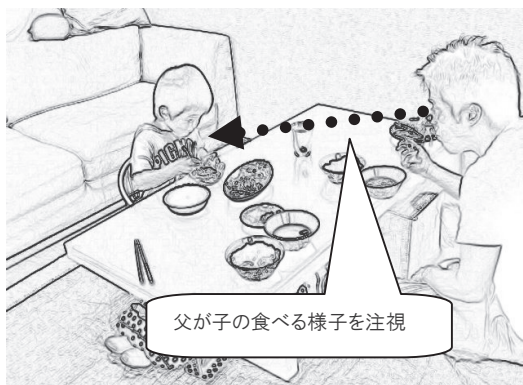


Figure 2 図式データ例

【結果b】作法・マナーのコミュニケーション方略
トランスクリプトB1「言語－作法・マナー」

ラベル「食事前後の挨拶」

母：いただきますは？

子：いただきますしゅ

父：あれ、違うよたっけ。ちゃんとおてて合わせて

子：いただきます！どうぞ

父：はい、どうぞ

パチンと勢いよく手を合わせて

手を合わせていただきますをし直す

父：ここに素麺を、入れて

自分のお椀に素麺を入れて見せ、すすって麺を食べる父

トランスクリプトB2「非言語－作法・マナー」

ラベル「道具の使い方」

母：こうじゃなくって、たっけ。たっけ見て、指
(子供の後ろから左手を回す)

子：(母の呼び掛けで母親が触れている自分の左手の指を見る)

子供の後ろから左手を回し、前から右手を回して子供の左手を触ってお椀の持ち方を教える母

母：ここにかけないで、こうだよ

子：(直してもらった持ち方をする子供)

母：うん

子：(箸でお椀の中の具材を混ぜる。手も使いながらナルトを食べる。)

【考察b】

トランスクリプトにおいて、食事に関する作法やマナーについて注意したり、指導したりするコミュニケーション方略が存在し、それらを中分類「作法・マナー」としてまとめた。

この中分類を、さらに、父・母が言葉だけでその作法やマナーを子に指示するコミュニケーション方略を「B1：言語－作法・マナー」と小分類した。そして、実際にその作法やマナーのやり方についてモデルを示したり、子どもの身体に接触して、その作法やマナーの行為をさせようとする「B2：非言語－作法・マナー」と小分類に分けた。

「B1：言語－作法・マナー」では、父・母から作法・マナーの確認する言葉の投げかけが行われる。そして、それに対して子どもはその作法やマナーをして見せ、

父・母はその行為に間違いがある場合は、さらに言葉を投げかけ、その行為が適切に行われるまで働き掛けを継続している。それに対して、「B2：非言語－作法・マナー」では、適切になるまで、直接的に作法・マナーの動作をして見せたり、身体を触って動きをさせたりしている。このことから、「作法・マナー」のコミュニケーション方略のプロセスとして、父・母からの言葉や模倣、身体接触などの「働きかけ」に対して、子によって作法・マナーの「行為の提示」がなされる。そして、その子の行為に対する父・母の「評価」がなされ、「不適切である」と判断されると、同じ「働きかけ」が繰り返されたり、違う「働きかけ」が行われたりする。また、「適切である」と判断されると父・母から「承認」が示され、子の食事行為が「促進」されるプロセスが存在することが明らかとなった。(Figure 3)

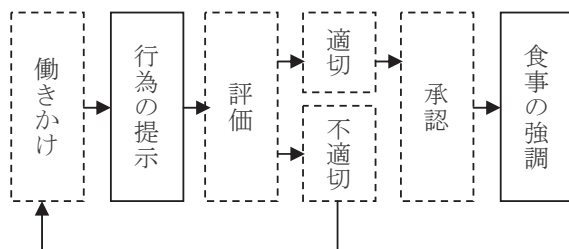


Figure 3 「作法・マナー」のコミュニケーションプロセス

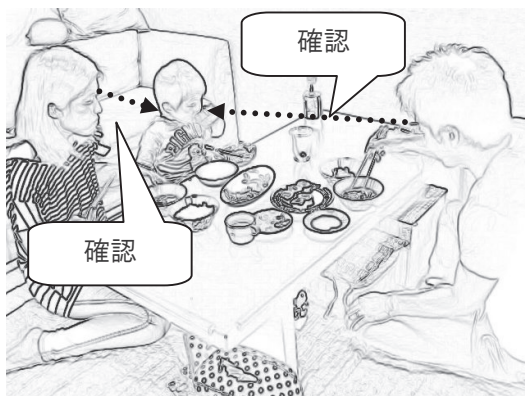


Figure 4 父・母から子への注視

C：円滑で楽しい雰囲気作りのコミュニケーション方略

トランスクリプトC1「言語－円滑・雰囲気づくり」

ラベル「褒める」

母：(子供の様子をうかがう母親) これ全部食べたの？

母：(母親は子供の後ろから手を回し、空になったお椀を持って確認する)

母：おー、すごい

子：ここに入れてあるよ。全部はないよ、こっちに

母：パンパカパーだね

子：え、こっちにだよ (自分のお椀の中に麺が入っていると、お椀の底を箸でつつきながら訴える)

母：あ、そこに？

子：(箸を手で持ちつつ口でくわえ、お椀の底に箸先を付けて前へ動かしたり後ろに動かしたりする。視線はテレビ、食べ始める)

母：(子の様子を注視している)

父：ママは？

母：たくさーん

父：え？そうなの？

母：うん、海苔巻きも食べてたもん

父：ああ

トランスクリプトC2「非言語－円滑・雰囲気づくり」

ラベル「場所の要求と受容」

子：ママ僕の隣にして (母を見て机を叩いて自分の右隣に座るように促す子)

母：そこ？

子：うん (このとなりに移動する母)

子：素麺も

母：ははは (素麺の入ったお椀も移動するように促す)

子：素麺も (お椀を移動する父)

母：今日たっけ、ママの隣がいいの？

子：うん

母：そっか、いいよ。じゃあ一緒に食べよっか

子：うん (めんつゆの入ったお椀を持って台所に向かう父)

【考察c】

トランスクリプトにおいて、家族全員が食事を円滑に行えるような楽しい雰囲気をつくろうとするコミュニケーション方略がみられ、これを中分類「円滑・雰囲気作り」としてまとめた。

この中分類で、言葉のやりとりを互いに楽しむことで雰囲気作りを行っているコミュニケーション方略を小分類「C1：言語－円滑・雰囲気づくり」とした。また、あまり言葉をつかわず、単純に隣に座ったり、近寄ったり、身体接触をすることでポジティブな感情を生み出しているコミュニケーション方略を「C2：非言語－円滑・雰囲気づくり」とした。

「C1：言語－円滑・雰囲気づくり」では、まず、父・母から問いかけて、さらにそれに対する子どもから返答が行われ、それに対して評価が行われる。この返答に一定の高い評価がなされると称賛が示され、さらにその称賛に対して子は食事への意欲を示していた。「C2：非言語－円滑・雰囲気づくり」では、父・母からの働きかけでなく、子どものから父・母への要求からはじまっている。その子からの要求に対して、父・母は要求された言動を実行することで、要求に対して受容した態度を示し、子はその受容的な態度を見てさらなる食事への意欲を示している。この「円滑・雰囲気

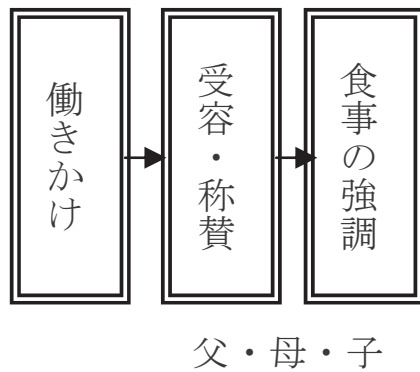


Figure 5 「円滑・雰囲気作り」のコミュニケーション・プロセス



Figure 6 道具の使い方

気作り」のコミュニケーション方略のプロセスとして、父・母・子からの疑問や要求などの「働きかけ」に対して、その対象者が「受容・称賛」などの態度を示すことで、その場にいる全員の「食事の強調」を産み出すプロセスが明らかにされた (Figure 6参照)。

D：共有化を図るためのコミュニケーション方略 トランスクリプト「D1：言語－共有化」

ラベル「情報確認」

父：おかわり
母：めん？めんないよ
父：ん？
母：麺？あたしの食べていいよ
父：え、茹でてもないの？
母：え、これ1袋全部ゆでたんだよ
父：え、そうなの
母：うん
父：(素麺を食べる)
子：(黙々と素麺を食べる)
父：素麺ってするする入っちゃうんだよね
母：だって百- あ、そっか。あ、そっか。ちょっと計算ミ、ミスったかも
父：え、あの前買ってきたそうめん2束あったよ、確か
母：あ、うん。同じ素麺。茹でればあるよ
父：あんの？
母：うん

トランスクリプト D2

ラベル「共通の情報獲得」

子：(TVを見ながら素麺を食べる)
母：(海苔巻きを食べ、TVに視線を移す)
子母：(ふたりの視線はTVへ)

【考察d】

トランスクリプトにおいて、家族のこれからの予定や一緒にTVを視聴することで同じ情報を共有するコミュニケーション方略が見られ、これを中分類「共有化」としてまとめた。

この「共有化」では、食事の後のこれからの家族での用事や、家族に関する情報を言葉でやりとりしているコミュニケーション方略を小分類「D1：言語－共有化」とした。また、言葉を使っていないが、同じ対象

に視線を向けているような身体活動の共有化を「D2：非言語－共有化」とした。

「D1：言語－共有化」では、父・母間の言葉での情報のやり取りがほとんどで、子はそれを聴きながら食事を継続している。さらに、「D2：非言語－共有化」では、家族全員がTVを見て無言で黙々と食事を継続したり、父と子が母の食事を準備する姿を見ていたり視線の対象を共有させつつ、食事を継続させている。この「共有化」のコミュニケーション方略プロセスとして、複数人数が同じ対象に視線が共有化され共同的な「注視」が生じ、それが継続しつつ「食事の強調」も行われることが明らかにされた（Figure 7参照）。

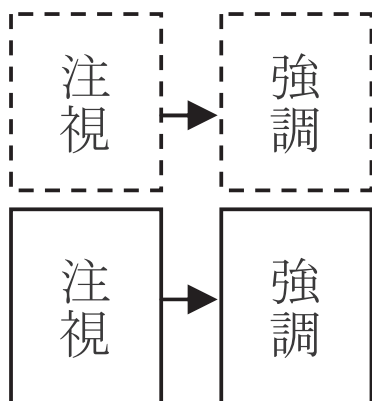


Figure 7 「共有化」のコミュニケーション・プロセス

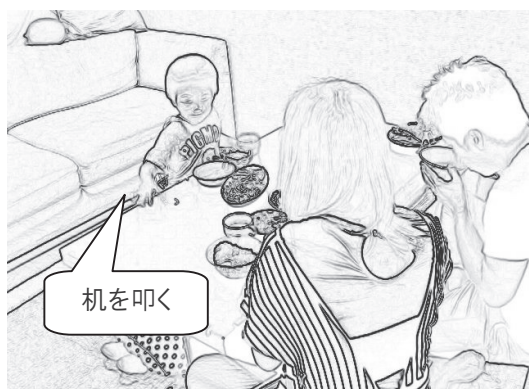


Figure 8 身体による場所移動の要求

(2) コミュニケーション方略の順序性

次に、コミュニケーション方略の分類表に基づいて、この家族の会話がどのように進められたのか、その順序性に着目して分析を行った結果をTable 3に示す。

Table 4 コミュニケーションの順序一覧

1	B2	16	D	31	A2	46	A1
2	B1	17	C2	32	A1	47	B2
3	B2	18	A1	33	B2	48	A2
4	B1	19	C1	34	A1	49	C1
5	B2	20	A1	35	A2	50	C2
6	B1	21	C2	36	B2	51	B1
7	B2	22	D2	37	B1	52	C2
8	B1	23	C1	38	C1	53	B1
9	A1	24	D1	39	C2	54	B2
10	B2	25	A2	40	C1	55	B1
11	B1	26	D1	41	C2	56	B2
12	A1	27	B2	42	B2		
13	D1	28	B1	43	D2		
14	B1	29	C2	44	D1		
15	A1	30	B2	45	A2		

【考察 ii】

この順序一覧を見ると、いくつか特徴があった。以下、その特徴をあげ、考察を示す。①出だしと最期の部分に「作法・マナー」のコミュニケーション方略が集中していることが理解できる。これは、まだ子どもが幼児であるために、食べる前にいろいろな準備や挨拶の仕方などについて教えようとする父・母の意識が強いからと考えられる。

つぎに、②「円滑・雰囲気づくり」のコミュニケーション方略は、食べはじめてしばらくしてから現れ、中盤以降に固まって出現している。これは、ある程度食事が進んでくると、お腹がふくれ食べるペースも次第に落ち着いてきて、口に食べ物を運ぶ回数が減り、話す時間が多くなるためと考えられる。

さらに、③中ごろに「集中」のコミュニケーション方略が固まっているが、これも食事のペースが落ち着いてきて、しだいに子の興味がTVに移行し、それに対して父・母が食事に集中させようとする言動が多くなったためと考えられる。

また、その後に、④「円滑・雰囲気づくり」が固まって表れているが、これは子がある程度割り当てられた分を食べ終わり、それほど子の食事のペースを気にしなくても良い状況になったためと考えられる。

さいごに、⑤「共有化」のまとまりはほとんどなく、全体にまばらに表れている。これは、情報の共有化が食事の展開と関連性が低いためと考えられる。

順序一覧で示された5つの特徴から、食事の展開と強

く関連しつつ、食事場面における家族間のコミュニケーション方略が繰り広げられていることが示唆された。

4. 総合考察

本研究の知見として、食事場面における家族間のコミュニケーション方略が8つに分類されることを示した。そして、それらが「集中、作法・マナー、円滑・雰囲気作り、共有化」(中分類)の4つにまとめられ、さらに「言語-非言語」(大分類)の2つにまとめられることを明らかにした。さらに、この4つの中分類のコミュニケーション方略が異なるプロセスで展開していることを示した。また、食事における家族の8つの分類の出現の順序性において5つの特徴が存在し、食事の展開と関連しつつ家族間のコミュニケーション方略が繰り広げられていることを示唆した。そこで、本章では、それらの知見をもとに、食事場面における家族間のコミュニケーション方略の意味について総合的に検討を行おうと考えた。

(1) 共に「食べる」と「話す」の組み合わせによる効果

家族と一緒に食事をするものの効果については、Bossard (1943) が栄養摂取の面のみならず、精神的な安定や自我の発達に影響を与えることを示した。衛藤ら (2012) においても、家族がそろって食事をする機会が多く、自発的にコミュニケーション方略が多い子どものQOLが高いことを示している。また、家族が話し合いをすることの重要性については、ベネッセ (2001) の「学習基本調査」や国立教育政策研究所 (2013) の調査において、その効果が学習能力だけでなく、人間形成や社会性の発達と関連性があることが示されている。藤井 (2006) も対象は高校生ではあるが、家族と共に食べること(共食)と、言葉をやり取りすること(会話)が情動を調整する能力と相関することを示している。すなわち、家族が共に食事をするという行為には、単に栄養摂取といった生物学・生理学的な効果のみではなく、人格形成や自己形成などの発達とも強い関連性を持つと考えられるのである。本研究でも知見として、食事におけるコミュニケーション方略の多様性を示し、幼児期がゆえに、父・母からはじまるコミュニケーション方略が多いものの、食事の展開に応じて、子ども自身も言葉を発するだけでなく、食べる行為や視線、

表情などの多様な非言語的なコミュニケーション方略を用いて自発的に会話に参加しようとする姿を明らかにした。共食と対話が同時に行われる家族の食事場面には、幼児のコミュニケーション方略を高めるという効果を持つだけでなく、家族の関係性を良好にすることで、幼児の社会性や人間性を高める効果があり、二重の意味で幼児の健全な成長に寄与すると考えられるのである。

(2) 方略の順序性と食事の文化

本研究では、食事場面における家族のコミュニケーション方略の多様性だけでなく、その順序性についても食事の展開との関連性を指摘した。とくに、「作法・マナー」についてのコミュニケーション方略が食事のはじめとさいごに集中していることを明らかにしたが、これは日本独特の食文化と道徳観との関連性が強いと考えられる。日本では、「いただきます」や「ごちそうさま」といった挨拶だけではなく、箸の使い方や茶碗などの道具の使い方、姿勢、食べ残し、偏食などと食事に伴う独特な慣習や価値観が多くみられる(中瀬, 2006)。森脇ら (2009) も、日本において幼児を持つ保護者がはしの持ち方や偏食など、食事に関するしつけに対する意識が高いことを示している。本研究が対象とした家族においても、食事に対して子どもがネガティブな感情を抱かないように、しつけをしながらも、同時に円滑な雰囲気づくりをコミュニケーション方略として用いることで、食事に関するしつけが、しつけだけでなく、円滑で和やかな雰囲気の中で行われる様子が示された。つまり、食事における家族間のコミュニケーションには、文化や道徳観の伝承といった意味も存在すると考えられるのである。

5. まとめ

本研究では、幼児期の子どもを持つ家族と一緒に食事をする際に生起するコミュニケーションの意味として、家族の関係性構築と人間性、社会性の形成の二重の効果、文化や道徳観の伝承の2つの意味があることを示唆した。しかし、その発達や成長のプロセスについては、捉える事ができなかったため、あくまでも3歳児の家族の事例にとどまらざるを得ない。今後は、子どもを持つ家族が子どもの成長とともに、どのように食

事のスタイルを変容させていくのか、そのプロセスを明らかにすることで、家族で食事をするものの意味の発達的な検討を行いたい。

【文献】

ベネッセ教育総研（2001）学習基本調査.

Bossard, J.H.S. (1943) Family Table Talk: An Area for Sociological Study. American Sociological Review, 8, pp295-301

衛藤久美、武見ゆかり、中西明美、足立己幸（2012）小学5年生の児童における家族との共食頻度及び食事中的自発的コミュニケーション方略と食態度、食行動、QOLとの関連. 日本健康教育学会誌. 20 (3). pp.192-206

藤井義久（2006）高校生の怒りとその関連要因の分析. 岩手県立大学看護学部紀要. 8. pp.61-68

Geertz, C. (1973) The interpretation of cultures: Selected essays. New York Basic Books 吉田禎吾訳（1987）文化の解釈学1. 岩波書店.Pp.32 s 4

石黒広昭（2001）ビデオデータを用いた相互行為分析－日本語非母国語を含む「朝会」の保育談話. 石黒広昭（編）. AV機器をもってフィールドへ－保育・教育・社会的実践の理解と研究のために. pp.121-142

岩田美保（2011）学童期のきょうだいをもつ家族の夕食時の会話－母子4者間・夫母子5者間で話題となる他者. 千葉大学教育学部研究紀要. 59. pp.43-45

Jefferson, G. (1974) Error Correction as an Interaction Resource. Language in society.3(2). pp.181-199

国立教育政策研究所（2013）キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書.

内閣府食育推進室（2010）食育の現状と意識に関する調査報告書

内閣府食育推進室（2011）食育の現状と意識に関する調査報告書

中瀬剛丸（2006）食事に関するしつけやマナーの伝承.食生活に関する世論調査. 放送研究と量差56(11). pp.50-57

中村伸枝、遠藤数江、出野慶子（2010）子育て支援センターを利用する母親の生活習慣・BMI・骨量と幼児の生活習慣.千葉大学看護学部紀要（32）, pp.57-61

西阪仰（1997）相互行為という視点－文化と心の社会学的記述. 金子書房. Pp.209

森脇弘子、戎淳子、前大道教子、松原知子（2009）3歳児と保護者の食生活と共食頻度との関連. 日本食生活学会誌. 20. pp.60-73

岡田みゆき（2001b）教育的な意義を含む母子の会話と母親の要因との関連：小学生における食事中的母子の会話の実態調査から. 日本家政学会誌 52 (4), pp.315-324

岡田みゆき（2003a）教育的な意義を含む父子の会話と父親の要因との関連：小学生における食事中的父子の会話の実態調査から. 学校教育学会誌 6, 11-20. 北海道教育

大学

岡田みゆき（2003b）中学生における食事中的親子の会話の実態－親子の会話における小学生から中学生への変化.

日本家政学会誌. 54(1). pp.3-15

外山紀子（1990）食事場面における幼・児と母親の相互交渉. 発達心理学研究1 (1). pp.10-19

外山紀子（2008）食事場面における1～3歳児と母親の相互交渉：文化的な活動としての食事の成立. 発達心理学研究. 19 (3). pp.232-242

外山紀子（2008）発達としての共食-社会的な食のはじまり. 新曜社. pp. iv - v

（平成26年9月30日受理）